解説

時局講演

「北海道農業の現状と課題」

研究所長　七戸長生

■前人未踏の局面を迎えての複眼的思考

ただ今ご紹介を頂いた私どもの地域農業研究所は、発足後五周年を迎える若い研究機関ですが、農業関係の産・官・学からなるシンクタンクになりたいものと大いにがんばっているところであります。当研究所のPRをさせていただく上からも、こうした講演の機会を与えて頂くのは大変光栄なことですが、本日与えられたテーマを考えてみますとこれがなかなか難しい問題のように思われます。

ご紹介にもありましたが、私が酪農学園大学で担当している教育は、食品流通学科という新設されて三年目を迎えるこれまた若い学科です。そこで行っている教育は、農業生産を川上とし、消費者のみなさんの川下との、中間に位置する川中（加工、流通）分野で、将来活躍したいと考える人材の養成を主題としております。

しかし、この川中部分に関する研究や調査は必ずしも十分に進んではおりません。したがって、昨年からスタートしたWTOなどの状況変化のなかで、川上である北海道農業はいかに行くべきかを探るとき、川中、川下をどのように認識し、あるいはどういう関連を持ちながら仕事をしていくべきか、ということについての検討が実際のところ大変立ち遅れていると思います。そのようななかで本日みなさんのお役に立つ話が果たしてできるだろうかと内心忸怩たる思いがあります。

とは申しましても、今の世の中、見通しが効かないということは様々な局面で起こっております。しかしその「見通しが効かない原因」は、意外と簡単に言えるのではなかろうか、と私は思います。

その一つは、世界的な経済秩序が今、大きく変化している真っ最中だということです。例えば「人口爆発」に代表されるように、人類がこれまで経験したことのない局面に入ってきている。したがって「先行きが判らない」とか「研究が立ち遅れている」とかの原因は、前人未踏の新しい局面に入っているという意味から、若干開き直り気味の言い方なのですが、「不透明なのは致し方ない」と思うわけです。

もう一つは、情報化が極端に進んできて、先に述べましたように前人未踏の領域に人類が踏み込んでいることからも、様々な情報が欲しいのですが、その情報が玉石混淆であり、しかも様々な情報のスピードが、早いもの、遅いもの、というように時差を持って入ってくるため我々は、ある意味では情報に振り回されているといった側面もあるのではないかと感じます。情報に右往左往していることと、そもそも事柄の本質からして、人類が未だかつて経験したことがないような局面に入りつつある、この二つの原因から先行きが非常に不透明だ、と言えるのではないかと思います。「首相が新年早々辞めてしまった」とか「蛇が何千匹も流れついた」など、何がなんだかよく分からない情報が我々に送られてくるのですが、本当に必要な情報を受け取り、過剰な情報をカットすることが大事になってきました。

その際重要なことは、ある一つの事柄やある一つの状況に関連して、せっかちな情勢判断を避けること、つまり、複眼的思考と謂いますが、いろいろな状況をじっくりと見る、「こういうこともあるが、他方ではこういうこともある」と、バランスのとれた観察＝複眼的な思考が必要です。

二つ目は、「どういうことが起こっても、最悪の事態にだけは陥らないようにしよう」という慎重さ＝「二枚腰の構え」が必要です。

複眼的思考を、日本農業に関して付言しますと、農家の人たちが国の政治を指して「猫の目農政」などと批判的に評することがありますが、かつて私は、カリフォルニアに戦後移民して二〇～三〇年経った日系農民たちにアンケート調査をしたことがあります。その中で、「日本の農業は今、農政が激動して方針がはっきりしないため大変困っている。農政が急激に変化した時に農民がダメージを受ける。このようなことについて、あなたたちはどう思いますか？」と質問をしたのですが、それに対する答は、「それは、政策に余りにも依存しすぎた判断ミスでしょう。それを猫の目農政云々するのは間違っているのではありませんか」と言うものでした。これは非常に厳しい（日本では、あまり言葉になって出てこない、特に、日本の農民からは一度も聞いたことのない言葉だ）なぁと思いました。「判断ミスは、複眼的思考を欠いているから生ずるのだ。農政はこう言った、しかし、実際はこうなるだろう、というくらいの距離をおいて考えていくことが必要だ」とも言うのです。やはり、海外に移民して散々苦労した農民たちは、同じ日本人の農業者でありながらもこれだけ違うのだなぁと感心したことがあります。

「最悪の事態だけは何とか避けるようにする心構えが重要だ」と話しましたが、その場合、視野の広い、奥行きの深い楽天性が必要なのだろうと思います。つまり、我々は今、人類の前人未踏の領域に入ってきてはいますが、これが終末だ、ということになると昨年大騒動を惹き起こした宗教のような話になってしまいます。我々は、課題を何とか切り開いていく叡知を持っているのだという確信と、楽天性が必要なんじゃないかと思っています。

あまりにせっかちに、際どく、いろいろなことを躱（かわ）して、他人に先んじて、といったことは農業では少々無理だ。と考えてみてはどうなのだろうかと思います。

■地球上に起こっている貧困、そして飢餓の実態

そこで今日、お話しようと思っているメインテーマの「北海道農業」のことは後段に譲って、いささか大風呂敷なのですがグローバルに考えて「一九九六年をどのように考えていくか？」という点を、みなさんにお話してみたいと思います。

世界の動きの中で、今、我々が考えなければならない端的な問題事例を、昨年六～七月に中国西南部の農村の貧困問題の調査に出向きました実情からお伝えします。中国の農村は今、大変な貧困状態ですが、そのなかでも最も貧しい地域と謂われている雲貴（うんき）高原＝雲南省、貴州省（チベットの手前、ベトナム、ミャンマーと国境を接した地域）の状況です。スライド（写真）を数枚用意しましたので、それを見て頂きたいと思います。人類にとって前人未踏の課題になっている事柄だという意味で、我々がせっかちにすぐ答を出そうとし、あるいは巧く立ち回って人に先んじて、ということではどうもなさそうだ。という話をまずはさせて頂きたいと思います。

（写真1）日本の稲作文化のルーツと謂われている雲南省の南の地域です。高床式建物の破風（はふ）造りに目をやっていただくと、神社の屋根の千木（ちぎ）に似た雰囲気の建物です。稲作を実際に行っている光景なども日本のそれと非常によく似ています。最貧困地域の一つの風景です。

〔1〕

〔2〕

〔写真2〕どんどん奥地へ入ると、急峻な地形になって、標高五〇〇～一〇〇〇㍍の山肌を縫うように行きます。下方には川が流れています。

〔3〕

〔写真3〕こういう所へ私たちは六～七月に入った訳ですが、洪水や地震などの災害を被ったところが何箇所もありました。

〔4〕

〔写真4〕がれ場です。文字通り「耕して天に至る」、非常に小さな棚田が綿々と続いてますが、いかに斜面が急峻かは、のり面の畦が目につくことからもすぐに分かります。下はがれ場になってしまっています。

〔5〕

〔写真5〕貴州省の奥地です。石を積んでは崩れるのを防ぎますが「寸土たりとも耕そう」ということです。土地は家族を単位としてあてがわれますが、家族人口が増えましたから増えた人口を養うためにびっくりするような土地も大事にして、作物を作っていこうとそれぞれが行います。それは自然条件からみてギリギリのところに挑戦するわけで、ちょっとした雨が降れば直ぐ崩れるというリスクも背負っています。

〔写真6〕奥地では茅葺きとも呼べぬ、ただ屋根の上に藁が載せてある、土が積んであるという家に住んでいる人々がたくさんいます。中国では「貧困」の定義を①収入金額②食料自給量の二つの指標から決めていますが、このように山肌を縫うような奥地では、現金を稼ぐ仕事などは稀にしかありません。自分の食料をまずは確保し、あわよくば種々の仕事にありつく、あるいは農産物の余った部分を売って金を稼ぐ。そんな事情ですから本当にギリギリの貧困で、災害に遇うと自分の食料も確保できない、他者から食料を買う金も持っていない、したがって即刻、飢餓が襲ってきます。

〔6〕

〔7〕

〔写真7〕このような地域を訪ねて、「どのような農産物を作っていますか?」「どのような仕事に就いていますか?」「どういう仕事を望んでいますか?」と聴いて回った訳です。

〔写真8〕トウモロコシが山肌に植えられている状況です。岩と岩の間一〇㌢四方もあれば、そこにトウモロコシの種を一粒ずつ植えるという状態で土地利用をしています。ひとたび雨が降ると当然、土が流れ、岩肌が現れます（石化）。表土が流れる災害は頻発します。しかも、災害復旧は個人にあてがわれた土地は、個人がしなければならないから大変なんです。

〔8〕

〔9〕

〔写真9〕私たちは好奇心から、「このトウモロコシは、一体どんな味がするだろうか?」と、この近くに来るまでは会話していたのですが、これほどまでして作っているトウモロコシを「食べさせてくれ」とは、とても言えませんでした。こんな厳しい状況が、地球上の約三〇㌫の人口の所で起こっているのです。私たちには、まだどうしても実感が湧かない事柄だと思いますので、スライド（写真）を見て貰いました。

■世界の動きと日本の有り様

こういったことを頭に置いて頂いて、今、人類がぶつかっていることを考えてみたいと思います。

WTO体制に移行し自由貿易の時代だと言われていますが、その一方では、スライド（写真）でご覧いただいたような事柄が現実にあります。自由貿易ということでは、かつて『世界生協連合』もガットの自由貿易推進に賛成の立場にあったように聞いていますが、最近、その方針は劇的な転換方向にあると仄聞しています。若干不勉強な点もありますので、この点、もしもご承知でしたら後ほど教えて頂きたいのですが、そのような中で、日本は一体どんなことをしているかを考えてみたいと思います。

幸い日本は、貿易黒字がここ二〜三年一〇〇〇億ドルとか一四〇〇億ドルとかのレベルにあります。しかも円高で、一九八六年以降一ドル＝一五〇円以下に一気に突入し、最近は一ドル＝一〇〇円に戻ってきているわけですが円高の基調は変わっていません。海外から食料を買い続けることに対しては、当面さしたる支障は起こっていません。去年の夏ごろからのシカゴ穀物市場の動きをみますと、かなり値上がりしています。したがって「お金が欲しくて、売りたくて困っているところがあるなら、我々が買うことについて良心の呵責を覚える必要はなかろう」というのが、日本人のかなりの部分ではなかろうかと思います。

日本には現在概ね五〇〇万㌶の耕地がありますが、海外から実際、輸入している農産物の量は、それを生産するための耕地に換算してみますと、一二〇〇万㌶に相当します。つまり、日本の耕地の二倍以上の耕地から生産される海外の農産物を輸入している「輸入大国」ということです。このように大量の食料輸入をしていることは、短期的には国際社会で大きな非難の対象とはならないと思いますが、世界の人口がドンドン増え続けていますので、近い将来には大きな問題となることが懸念されます。

■三つの問題＝「食料」・「資源」・「環境」

世界の人口は、最近一〇年間で九億人増えました。一年間に九〇〇〇万人、一日二〇万人以上のペースです。それに対して「資源の方はどうか?」「土地はどうか?」と問題にされていますが、実際に今、最も心配なのは「水」じゃないか、と言われています。人々が生きていくための地下水が確保できるのか、とりわけアフリカなどで水の問題が懸念されています。それに加えて石油、その他の「資源」確保の問題があり、「環境」の問題が起きています。

「食料」「資源」「環境」という三つの問題が、人口増加に伴って深刻に現れてきました。その象徴的な事例として先程、中国最貧困地域の状況を見て頂きましたが、これは絵空事ではないのです。

現在日本は、外貨もある、売る人がいるから買えている、だが今後のグローバルな状況のなかでは、世界の飢餓（予測される食料・資源・環境問題）の解決のために、「日本は、どのような手を差し延べているのか?何らの手も差し延べないで唯々金の力で食料を奪い取るように買っているのではないのか!」という非難の声が、既に途上国の人々から、特に、中南米の人々から挙がってきています。まだ、アフリカや中国などからは、日本の食料大量輸入に対する非難の声は出ていませんが、こういう点について、私たちは今から心配りをしておかなければいけないのです。

経済的に非常に豊かＩ経済大国だ、と言うのであれば、世界に対して一体「どういうことができるのか」「どういう手を貸すことができるのか」が問われます。勿論、「安いモノ・良いモノ・日本にないモノ」を買うことは、企業経済の原則ですから「何か文句があるのか!」との言分もあ

るとは思います。しかし一方では、途上国（例えば雲南省の農村のような）の農民に農業技術を教えてあげるなどの国際支援活動も必要です。

ところで雲南省では、義務教育に通うことができる子供の数が以前は四〇％くらいだったのが、現在はそれを大きく下回っているそうです。省の財政事情が悪いから、県も村も財政が逼迫して教師を雇うことができないのです。特別の教師が生徒たちを教えてくれるのですが、教材費、その他の費用を生徒が持っていかなければ教えられないという状況になっています。ところが貧困な生活事情にありますから生徒たちは通学することができません。「中国は義務教育が建前じゃないのですか？」と尋ねてみましたが、「それは建前だが、地方財政は災害復旧や道路敷設などで目一杯です。とても優秀な教師を雇うための給料までは払いきれません」との答でした。学校へ行かない子供たちがたくさんいるということは、農業技術が発達する可能性も非常に狭くなりますし、仮に道路が造られても町へ出て行って仕事にありつくことさえ危ういだろうから、飢餓寸前の人々がドンドンドンドン滞留している状況なのだと思います。

私は、そういう状況の中で日本には偶々（たまたま）金がある、だから「安いモノ、日本に合うモノを買うことに、文句があるか！」というやり方が通用しなくなるのは間近いだろうと思います。勿論、経済的な観点から、より現実的な先行き不安というものもあります。たとえば、いつまでも円高の為替レートが続くのだろうか？円安などで日本の経済力が弱体化した場合、金に飽かせてモノを買うということを当然と思ってきたが、果たしてそれができるのか？　世界中で食料が急速に逼迫してきた時、日本が従来通り買うことが果たして可能なのか？　という予測の問題があります。現に中国は、一昨年から穀物（大豆・コウリャン・トウモロコシ）の輸出を禁止しました。いかに食料事情が逼迫してきたかを裏付けています。外貨不足や輸送事情などの様々な事情もありますが、世界的にもう少し目を開いて観ていきますと、今、日本が行っているスタンス（自由貿易の市場で必要なら買い続けること）は、かなり危険なことではないかと思います。

■みんなが仲良く持ちつ持たれつで　地域に永住していく

当研究所が昨年、『生協の組織と事業に関する調査』を、生協総合研究所に委託して調べて頂いた資料があります。アンケート調査対象（全国の地域生協と事業連合会）合計三五生協の集計結果ですが、興味深いのは世界の食料状況との関連で、「国産の農産物と輸入品の取り扱いに対する考え方をお聞かせ下さい」との問いに対して、「国産は安全だ、輸入品は危ない（劣悪だ）、といった極端な対比はせず、国産であろうと輸入品であろうと、必要なモノ、良いモノを安く扱おうとしている」と回答した（国産品・輸入品を中立的なスタンスで取り扱っている）生協がかなり多かったことです。

「それでは、国産農産物の消費を増やすために、一体どういうことをすればよろしいとお考えですか」との問いに対しては、「少々の改善では購買の余地は極めて小さい、生産面ではコストを下げて品質をよくすること、流通面では市場規制を緩和でもしなければ国産品は増えない」との答が非常に多くを占めました。我々、北海道農業あるいは日本の農業に関わっている者からみると、「もう少し考えてほしいなぁ」と思うお答の内容です。さらに、「北海道の農業に対する期待と要望」をお尋ねしました。これに対しては大変大きな期待を寄せて頂いております。ところが中身をよく読んでみますと「輸入農産物に対抗できるようなコスト削減、品質面の向上、流通コストの削減をやれば、大変よい」となっており、北海道農業に対する期待は、「海外農産物に負けないようなコスト安の仕組み」を求められているようです。これも実は、海外がどんな状況で農産物を供給しているのか、それに対して北海道と謂えどもこのままでは

殆ど勝負にならないような状況で輸入がされていることを承知の上で、それでも「北海道がんばれ！ という主旨なんだなぁ、このあたりが辛いなぁ」と思いながら、このアンケートを読ませて頂きました。

私は、素朴にですが、「市場経済の原則なのだから、安いモノがあれば、金があるのだから買う、そのことに何か文句があるか」と謂わんばかりの状況というのは非常にギスギスしている。むしろ、「何とかしてみんなが仲良くそこに永住していく知恵がないだろうか」と（中国の貧困地域を見て歩いたりしたこともあって）絶えず思っています。

■大量生産・大量消費の先には　大量の廃棄物問題が潜む

先年ヨーロッパへ出掛けた折に、これはちょっとヒントになるな、と思った事柄があったのでお話をします。

北海道農業に対する風当たりは非常に厳しい。今の状況でもアンケートの回答のように厳しいわけです。このような時代に生協のみなさんから格別の心遣いといったものを期待するのは些か甘い、と私は思いますが、お互いにみんなが助け合ってこの土地で仲良く暮らす（永住していく）ための生活者の知恵もあるんじゃなかろうかと考えるのです。

それは、ドイツのミュンヘンから南へ一〇〇㌔程離れたバイエルンの山奥へ調査に行き、グループで民宿した時の体験です。我々十数人で全戸数百戸くらいの村に入り込み四日間分宿をしました。

調査テーマは「農家民宿の実態」と「農業機械バンクの実例」などでしたから、我々のガイド役は農業機械バンク（地元の事情に最も精通している）のマネージャーに依頼しました。そのマネージャー氏は年齢も三〇歳を過ぎたばかりで、それほど分別に長けているというわけでもなく村の中堅幹部といったところでした。彼のガイドで、私たちはアルプスに続く海抜二〇〇〇㍍級の山まで（カウベルを下げた牛がそれをガラン、ガランと鳴らしながら登っていく森林限界の牧野まで）登ったり、機械バンクが請負作業をしている森林伐採の現場を視察したりと、種々調査の仕事をしていました。

そして、村の所々で昼飯を食べたり、晩飯を食べたりもしておりました。民宿というのは朝飯とベット（B&Bと呼びます）だけですから、昼と晩は外で食べます。ある日の夕食を小さなレストランで食べました。スープと特製のソーセージとワインの型通りのメニューでしたが、これが大変美味しくて「明日の昼飯もここで食べたいなぁ」と、みんなで言ったのですが、ガイド役のマネージャーは「あの店の料理はもう品切れだ……」とか何とか、甚だ主旨不明瞭な言質で「次はこっちのレストランに行きましょう」と。そのレストランで食べた料理も結構美味しかったので、また「明日もこのレストランへ行きたい」と（日本人は、美味しい店を見つけるとその店をお得意として通いつめたいという癖があって、特に外国へ行くと何が出てくるか分からないから、一度食べたことのある美味しい店に行って安心したいというところがあるのか？）希望を出しました。ところが今度もマネージャー氏は言を左右して別の店に案内する。

そこで、「ああ、こういうことだったのか……」と気がついたわけです。ミュンヘンから一〇〇㌔も離れた山奥の村に、日本人のように旨いモノには惜しげなく金を出して食べるような人が大勢やってくることはそう滅多にない。そういう客が偶々来たのだから、村内のレストランや食堂にできるだけ万遍なく案内して、店の収入機会を散らばそうと企んだのではないかなぁと思ったのです。

機械バンクというのは、牧草を刈る機械を持っている人、麦を刈る機械を持っている人、あるいは薯を掘る機械を持っている人が様々いて、「私の農場の牧草を刈ってくれ、その代わりに薯を掘ってやる」といった形の相互乗り入れの組織で、マネージャーは相互の仲介をする役なんで

す。だから村の人々がお互いに持ちつ持たれつで巧くいくように農業機械を中心に仲介をしています。マネージャー氏の収入はその仲介手数料であり、それによって生活をしています。三十代前半のマネージャー氏の「収入はどのくらいか?」を（我々は調査マンだから何でも遠慮会釈なく）聞くと、「巧くやれば大学教授くらいの収入にはなる」（こちらも大学教授だから少々ギクッとしましたが…）と答えていました。村全体を見渡して、万遍なくみんなが持ちつ持たれつで巧くいくように、といった彼のセンスから推測すると、多分「ここのレストランのソーセージが美味しいからまた食べたい」と言っても（ひょっとして本当に品切れだったのかも知れませんが）敢えて客を散らばせたということ＝バランスのとれた考え方は、今、私たちが考えなければいけない重要なことではなかろうかと思います。

コストでは太刀打ちできなくても、そこに永住する人がいなくなると、山登りやスキーなどで村に訪れる人も来なくなってしまう。民宿をする人もいなくなり、村が荒れてしまう。そこで、こうした条件不利地帯に「所得の補助をしましょう」という政策を、ドイツをはじめEUでは殆どの国でやっています。デカップリングの政策と謂われますが、この条件不利地域というのは、カナダやアメリカ、ブラジル、オーストラリアなどのだだっ広い所でやるような、能率的な農業は到底できません。牧草も手（長柄の鎌）で刈っているのです。そうした所でそのようにして造られたチーズなのだから、「値段は高くても手造りだから健康的で旨いだろう、この人たちの味というものを味わってみようか」と、そして「農業を保とう、それが地域を保つ必然性でもあるのだ」という社会的なコンセンサスになっています。これがヨーロッパの全般なわけです。

それはマネージャー氏が、私たちをガイドしながら、それとなく食事の場所を変えることによって収入機会を均等化しようとした配慮にも通ずるのではないかと感じました。客のたらい回しと言えなくもないのですが、そこにはちゃんとした哲学があるわけです。少々値段が高くても、少々不便でも、少々見栄えが悪くても、そこで一所懸命住んで努力をしている人の「努力を買う」。そのことによって持ちつ持たれつの社会が保たれるのです。

冬季間雪が降ると、もしも牛を放牧していなかったとすれば繁みができて、その繁みに雪が引っ掛かると雪崩の原因になるんですね。そこで牛を通して峠へ行く道などを保全することは、人々がリゾートやバカンスで遊びに訪れる環境を保つことなのです。これが条件不利地域を保全しようとするヨーロッパの人々のコンセンサスの根底にあります。日本の場合ですと「環境を浄化して緑がどうのこうの…」と言うくらいの抽象的なものですが、彼らの場合には「牛が通らなくなればブッシュが出来て山登りも危険だ。スキーも雪崩がいつ起きるか判らないから危険で行けなくなる。民宿をする人たちが住まなくなると過疎の村になる。それでは困る」と、具体的に、その人たちが居るようにしなければいけないという課題があります。

このように考えますと、いわゆる「工業の論理」と「そこに人々が永住することをお互いに持ちつ持たれつで保とうとする考え方」は、根本的に違うということに気をつけなければいけないのじゃないでしょうか。つまり、工業の場合には、効率中心・大量生産（能率の上がるのが大量生産、大量消費なので）ということになります。そのような生産の仕組みを進めていこうとすると、資源のあるところへささり込んで行って使えるだけ資源を使い尽くす。資源が使えなくなったらそれで終わり。北海道の産炭地がその一例だったと思います。そういう形での効率中心・大量生産は資源の使い捨てに他ならないと言えます。

農業でも同様の具体例があります。アマゾンの熱帯雨林を伐採しています。そのことによって、地球の酸素量が云々といった環境問題としてみなさんもご存じだと思いますが、むしろ我々が恐れなければいけないのは、熱帯雨林を伐り払って無肥料で耕作する（赤道直下に位置し、森林であった時の腐触が大量に蓄積されているから無肥料でも作物が採れ

る）のですが、しかしこれを何年か続けると干乾しレンガのようになってしまう。その地では耕作が不能となり、これを放棄して、また隣の熱帯雨林の伐採に取り掛かる。そこに永住するのであれば、決してそういう利用の仕方はしないであろうと思われる農業の形がドンドン広がっている。というのがアマゾン開発のもう一つの問題なのです。

工業の効率中心・大量生産の先にあるのは使い捨て＝資源のある所はギリギリまで使って、それで作った（作られた）モノ（製品）は大量流通・大量消費となります。その先は大量の廃棄物へ行き着きます。

北海道でも、資源を収奪する形で産炭地が壊滅し過疎地が続出していくという動きがありますが、もう一方では、「人が居ない所だからゴミ捨て場にしたい」ということが、釧路や宗谷の何箇所かで起こっています。それも北海道のゴミじゃなくて、本州から船でゴミを運んできて捨てる場所に北海道がなっているのです。これは地球の上の環境を破壊するという点では二重の意味を持ちます。一つは、地球上の資源を使い捨てにするという意味で、もう一つは、大量生産・大量消費そして大量廃棄という形の環境汚染でダメージを与えます。

少々能率が悪くても、バランスがとれるような、循環がとれるような方向を考えなければいけないんじゃないかと感じています。

■農産物の「原料供給依存型」体質からの脱却が肝心

日本の食料自給率がドンドン低下した原因は一体何か?を調べてみますと、それは（末端の消費者が輸入農産物をたくさん食べるようになったためではなく）、食品加工産業（小麦粉や食用油ｅｔｃ）や飼料産業（家畜の餌）など農産物を原料とする工業＝製造業が一番の原因なのです。消費者は、日本の食品加工産業が製造したモノだから、それが輸入品とは気付かずに食べてきたのではないかと思われます。

先程紹介したアンケートでも、国産と輸入農産物と言った場合、「これは国産」「これは輸入品」と目に見える形で表れるモノに反応を示した結果だろうと推察しますが、実際には目に見えない形でも輸入農産物は日本の食卓や市場を占拠しています。農産物を原料にする工業の立場から言えば、「効率的な生産をするためには均質な原料が欲しい、しかも大量に欲しい、価格は安ければ安いに越したことはない」わけです。しかし、そのような原料を供給できる農業は、残念ながら日本にはありません。日本列島各地から、四国にもある北海道にもあるというようなモノを寄せ集めてきた場合、品質は均等にはなりようがありません。しかもコストが高くなる。それじゃということで、ミシシッピー川の下流には日本の商社や農協の穀物サイロがドカーンと建っています。そこから専用貨物船でドンドン日本へ運んできます。

これは工業を経由した農産物のことですが、年々その量が拡大してきました。私たちは工業の論理が貫かれることの様々な危険性を訴えますが、それも段々難しくなってきました。「外国のモノばかり買わないで国内のモノも買って下さい」といった方向も推進されてはいますが、これにも限界があります。私は、北海道の農業といえども工業との付き合いのみで生きていく農業を、そろそろ考え直さなければならない段階にきていると思います。

つまり、多くの農産物を加工用の原料として供給する北海道農業の在り方は、加工産業である工業（製油業・製粉業・飼料製造業ｅｔｃ）と互角に付き合うほどに強力ではないし、工業に対抗できるような販売力や商業上の立場も持っていないからです。やはり最終段階まで手間暇かけて独自性のある農産物を創る戦略的な方向を北海道農業も選ばなければならないと思います。「北海道の農産物は大変良い」と言われ、それが「京都」の漬物となって市場に出ていたり、「北海道の茸」が「信州ブランド」の醤油漬となって売られている現実は、北海道農業にとって決し

て得策ではないでしょう。これらのアピールが、北海道農業は余りにも弱かったのではなかろうかと思っています。

私は別段、工業を敵視しているわけではなく、自動車やテレビとかいろいろなモノは工業の力に頼らなければならないとは思いますが、要は程度の問題です。これに七割から八割、時には九割以上も工業に依存するやり方でいいのだろうか、と思うのです。

グローバルに進行している全人類的な課題として、「食料」「環境」「資源」の三つが目の前まで来ていますが、それを解決するにはどうしたらよいのでしょうか?

食料問題では、食料を工場で生産することが工業側で考えられています（クロレラ、人工肉etc）。しかし、工業的に造るということは、能率の極限を追求していくことを意味し、その限りにおいては大量生産⇩大量消費⇩大量廃棄物が絶えず起きるだろうと思います。また仮に、環境が悪くなった時の改善の手立てを工業側が考えてくれたとしても、そのツケがまた回ってきます。自己完結的に「食料」「環境」「資源」の問題を工業が解決することは恐らくできないだろうと思います。たとえば、燐鉱石（肥料の三要素の一つである燐酸の原料で、元々は海鳥の糞の化石）は、今後一〇～二〇年で枯渇してしまうと言われています。（海水から採るとかが謂われていますが）本当に失くなったらどうなるか?

■長期戦の構えで健康で楽しい農業を永続させる

「資源」の枯渇を補足するのは農業の大きな役割です。大地と水と、それに燦々と降り注ぐ太陽があれば光合成ができ、食料をつくることができます。しかもそれと同時に「環境」を浄化し、目を楽しませてくれる緑が茂り酸素が供給され、様々な屑などが分解され作物に吸収される循環が起こります。しかも、食料が供給され環境が浄化されるだけでなく資源の蓄積の方向へも向かっていきます。

たとえば、「石油が失くなったらどうするか?」という課題に対して、ブラジルでは穀物や馬鈴しょから採ったでん粉をアルコールに転換し、そのアルコールを利用した自動車が実際に走っています。いずれ化石燃料が枯渇した場合、それをカバーするのも農業じゃなかろうかと思えるのです。間もなく二一世紀に入って人類が直面するであろう食糧問題、環境問題、資源問題を同時に解決する力を持っているのが農業なのです。工業は確かに能率的に我々に大変便利なモノを供給してくれていますが、もう一方で農業が失くなってよいという理屈には到底なりません。

それでは、この農業をどのように大事にしていくのか、どのようにして今後とも永続させるのか、ということになります。その場合、「この土地に永く住んで農業をやる」という農業でなければ大変に困るのです。アマゾンの熱帯雨林を伐り払うことは、そのことだけでも地球環境に大きな衝撃を与えるわけですが、実はそれだけに止まらず、その開発が企業採算を優先するようなやり方で進められると、資源の使い捨てや限られた地球の土地を粗末に使ってしまうことになるのです。「それじゃ困る」という観点で私たちは中長期の問題を考えていかねばならないと思います。

今、農業分野でも「コスト、コスト」と叫ばれていて、北海道農業もコストを下げるために大変な努力をしています。しかし、このことは経済活動をする場合の永遠の課題です。今日、一所懸命コストダウンをやったから、未来永劫、末代までそのコストでいいというものではないのです。今日やったコストダウンを踏み台にして明日は更にコストダウンをしなければならない、絶えることのない永遠の課題です。しかもそれは、一朝一夕に達成されるものでもなく、努力をすれば一朝一夕で終わるものでもないのです。

最近私は、北海道の農村の人たちにお会いした折には、「北海道農業もコストダウンをしなければならないのだが、その永遠の課題にじっくり

取り組む姿勢、基盤を創らなければいけない」「息せき切って、夜も寝ないで間に合わせれば当座は通用する、というようなコストダウンなら食うものも食わず急いでやったらいいでしょう。だがコストダウンというのは、そのようなものではない！　そもそも相手にしようとしているのは一体どういう者なのか？」と、機会あるごとに話しています。例えば、カリフォルニアの米は、二〇〇～三〇〇㌶の面積を持った農場で、しかも（殆ど雨が降らず晴天続きの気象条件の下で）田植え期間は二カ月、刈り取り期間も二カ月くらいはある。大型機械を五〇～六〇日も継続的、有効に使える条件でやっている。

北海道の場合には、一週間で田植えを終えなければ稲は雪の下になることを覚悟しなければならない。一〇日間で刈り取れなければ凶作は覚悟しなければならない。したがって僅か一週間、僅か一〇日間のために高性能の機械を用意せざるを得ない。そうしたハンディがある。仮に北海道で二〇〇～三〇〇㌶の稲作農場を造ったとしてもカリフォルニアと競争できるわけがないのです。

それを工業の発想で、あたかも競争出来るかのように考えて「自由貿易が良い」と、WTOあるいはG・U・Rで押し切った方向なのです。勿論それは、農産物を輸出している国が押し切ったのです。しかし、そのような押し切り方で、今まさに世界の各地で飢えようとしている人たちの面倒を将来とも見きれるのか、否、到底見きれるはずがない、と私は考えています。

コストダウンは長期戦です。その長期戦を闘うために我々はまず健康な生活を保つ、そして仲良く楽しくやっていく。「楽しく努力しながらコストダウンを進めていこうよ」でなければいけないのです。長期戦であれば自分の代で出来なければ子供の代、子供の代で達成できなければ孫の代、というような構えでやらなければいけないのです。

実はこのような闘い方を日本人は非常に不得意にしているんですね。源平の合戦でも、それ以前でも夜討ち朝駆けの闘いの話ばっかりで、長期戦で勝ったなどという話は一度もありません。それほどに日本という国は、ある意味で自然条件に恵まれていたとも言えます。しぶとく（自分の代で出来なければ子の代、子の代でだめなら孫の代と）生きなければならぬほどの苛烈な状況に、立ち至ったことがないということなんだろうと思いますが、「少なくとも自分たちが健康で、楽しく、面白くやれるような形で農業の良さを見つめ直す、捉え直すことが必要なんじゃないか」と、農家の人たちが集まったときには話すことにしています。

今、農家の人たちの多くは「外国からドンドン安いモノが来る、ウロウロしていたら蹴散らされて殺されてしまう」と浮足立っていますから、「地球上では今、人類は長期的にみれば食料、環境、資源の問題に直面しており、これに対処する上からも農業がないがしろにされるなんてことは到底起こり得ない」と話しますと、「農業の将来は前途洋々たるものがあるんだな、それじゃバタバタ慌てなくてもよろしいのだな」と、農家の人たちは一面ではホッとするのですが、そこが落とし穴で「前途洋々たる状況を目前にして、その寸前で息が続かなくなったらどうするのか」というのが北海道農業の一番の問題です。

■ギリギリのところで手遅れにならないように

そのような事例はかつての農村にはよくありました。たとえば私が実際に見たのは本当に皮肉な話だったのですが、十勝管内で日高山脈の麓の開拓地を調査で訪れた時のことです。「入植以来十数年間、村を流れる川に橋がなかった。そのために橋の向こうで農業をやっている農家は、農産物を出荷するにしても資材、その他を運ぶにしても往来が不便で大変困っていた。長年にわたって陳情を繰り返した結果漸く橋が架かった。今日はその橋の渡り初めだったが、最初に橋を通ったのは、その日が待ちきれず離農する人の引っ越し荷物だった」と言うのです。こんなギリ

ギリのところで手遅れにならないように北海道農業を持っていくためにはどうしたらいいのだろうか。「前途洋々たるものがあるよ」と言うと、「そうなった暁にはあいつらにはモノ（食料）を売ってやらないぞ」と暴言を吐く農家も一部にはいますから、「それはちょっと違うよ、売ってやらないと言えば買ってくれるお得意さんが餓死してしまって、お得意さんが減るんじゃないの」と冗談まじりに言うのですが、どうしても長期展望を北海道農業は持たなければならないことは確かです。変わり身を素早く出来ないのが農業の特質なんです。

工業の場合は、製品が売れなければ金が入ってこないから、食べていけない、死ななきゃならない。だから売れないということを大変怖がります。しかし農業の場合は、少なくとも食べ物を作っていますから売れなくたって自分が生きていく分には、一～二年凌ぐことは「何とかなるさ」という強みがあるんですね。そのギリギリのところまで視野に収めていける産業なんです。そういう産業なんだということを頭に置いて、今まで自分がやってきたことはどういうことだったのかを考えるべきなのです。

ところが「規模拡大だ！」「大規模経営だ！」と言います。北海道の酪農家ですと乳牛を平均六〇～七〇頭飼っていますが、そこまで飼養しますと「私の人生の半分は牛舎で過ごすみたいだ」と、農家の主婦が嘆き声を上げるほどに生産、生産で追い立てられるわけです。しかも「コストの安いニュージーランドから輸入される乳製品は、日本の五分の一だ」と言われながらです。このギリギリで働いて人生の半分は牛舎の中で、というほどこき使われている状況、しかも借金まみれをどうやって解決していけるか、やはり長期戦しかないのです。今日明日を凌いだってどうなるものでもない。

私は、「農業というものは楽しいな、面白いな、こういう工夫の余地があるな」という部分に六割くらいの力を注ぎ込んでみてはどうか、残りの四割は工場生産と同じように「能率を追求し、コストを追求する」いずれコストはもっと下がるかも知れないが、当面は、そのようなスタンスでやっていかねばいけないと思っています。

そのことは日本の経済も同様ではないでしょうか。つまり、現在は七～八割、場合によっては九割近くも工業にドッと傾斜して国民経済は動いている。だけどそうじゃなくて工業のウエートを五割程度に止めて、農業はじめ第一次産業を大事にする仕組みを考えるべきだと思います。

今更のように工業に傾斜した食品加工産業の流れの中で動いているということを気付かせるデータの一つとして、日本全国の広告費統計があります。一九九一年には全体で五兆七二六〇億円支出されていますが、その内、食品・飲料は九、三三〇億円で比率では一六％に及んでいます。さらに、企業の売上高に対する広告費比率を見ますと、電機製品の松下が一・八六、自動車の日産が〇・八七であるのに対し、食品・飲料ではサントリー五・三八、アサヒビール四・七一、味の素五・五三と異常に高い比率を示しています。「食料の輸入大国だ！　飽食だ！」云々と言うが、人間が食べる胃袋には限界があります。そのパイの分け前に対して企業が大量生産・大量消費を完結させるため、商品を売り込むことをこれほどまで熾烈に行っている象徴が、広告だろうと思います。しかも、その広告の中身を見ますと情けなくなるほど愚劣なものが、特に食品・飲料に多いのです。日本の農業・食料を巡る状況がいかに毒されているか、嘆かわしい限りです。しかもそのことは、特定の企業だけに止まらず、国民全体が「金さえ出せば、安ければ」という感覚に馴れてしまったきらいがあります。

■間もなく迎える二一世紀の課題にどう応えるか

ヨーロッパの国々のように、そこで永く生きてがんばろうとする人たちをお互い励まし合い助け合って、食料を供給し環境を保全していくた

めにどうすべきか、という観点から北海道の農業を見て欲しいと思います。

北海道の農業者も短期決戦でコストダウンをするから、皆さんに北海道農業の応援団になって頂こうなどと簡単に考えるのは甘すぎると思います。何故なら今まで、原料農産物を供給することが主で、消費者から殆ど離れた位置にいた者が俄に擦り寄っていったからといってすぐにどうなるはずもないと思います。

ここは方針をはっきり決めて長期戦でやっていこう、それに勝つためには、死んでしまっては闘えないのだから、自分自身が健康で楽しくやっていくなかでコストダウンも図る。あるいは独自性を発揮しながら面白い農業をやっていくなかから、二一世紀の課題に応えていくことが大切だと思います。

その切替えは大変難しいかも知れないけれど「こんなこともあるよ」という事例を紹介します。

数年前になりますが、石川県で稲作二〇㌶強を請負耕作している大規模農家の調査をしたことがあります。経営主は三〇代前半でもともとは兼業に出ていたが、父親が病気で働けなくなったため家に戻って農業に専念することにした。しかし、兼業の時の所得に匹敵するほどの所得を農業でも上げたいと考え、ハウスを数棟建てた。稲作のほうも周りからドンドン耕作を請け負って大規模にやってきた。ふと気がつくと、兼業の時には当たり前だった子供との付き合い（運動会や海水浴などに行くことなど）が全然できなくなっていた。「これじゃまるでみなし児にしてしまう、これで後を継げと言ったって継ぐわけがない」。そこで「子供が小学校を卒業するまでは戦線を縮小しよう」と考え、所得が減ることは覚悟して子供と付き合うことを重視し、ハウス栽培を休むことにした。その結果、「所得は覚悟したほどには減らなかったんだよなあ」と言うのです。

つまり、戦線を縮小したことによって、自分で出来ることは何でも自分でやったので所得率が向上した（経費の比率を切り詰められた）、売上は確かに減ったが手取り額はそれほど減らなかったのです。「子供を放っぽりだしていた、あの頃の忙しさというのは一体何だったのか今でも悩みの種だ、恥ずかしい」と言うのです。

私たちも同様で、「忙しい、忙しい」と動いていますが、本当に必要なことをやっていて忙しいのかどうか？　戦線を拡大して目一杯経費をかけて規模を拡大していく、まさに工業の論理です。本来、効率追求も工業の論理ですが、実際には経費が嵩んでいくのです。

「とかく北海道の農業は全国の四分の一も耕地があって大きい、一戸当たりの耕地も大きい、と規模の大きいことを言い立てるが、長期戦に耐える農業に切り換えよう！　少々売上が減って所得が減ることも覚悟の上で、面白い、楽しい農業に持っていこう！　そこからもう一度コストを下げることなどを考える農業をやっていこうよ。息せき切ってバタバタして一夜漬けで間に合うような国際化の流れでもあるまいし」と、農家の人たちにも話しています。

北海道の農業も徐々に動いていかなければ活路はみつからないと思います。あともう一息で潰れてしまっては話が始まらないのだし、そういう意味で、先程ご紹介したアンケートの、「農産物の国産と輸入品の対比」や「北海道農業に対する期待」に対しても、みなさんのお考え方などを再検討して頂けますと、北海道の農民もギリギリのところで努力をしていく姿勢がよりしっかりしてくると考えます。

農業は、人類の深刻な課題を同時並行的に打開できる貴重な産業であり、楽しい産業、面白い産業です。お力添えを期待します。

ご静聴ありがとうございました。

〔本稿は、一月九日開催の北海道生活協同組合連合会「96年新春時局講演会」から収録編纂いたしました〕